

20世紀初頭ドイツにおける男女共学の実験

— オーデンヴァルト校生徒の日常生活 —

渡邊 隆 信*

(平成9年9月20日受理)

はじめに

本稿は、「自由学校共同体」＝オーデンヴァルト校における教師・生徒らの共同体生活の全体像を描き出す作業の一部をなすものである。論者はこれまですでに、同校の共同体生活を織りなす基本的な人間関係の類型として、生徒－生徒、生徒－教師、教師－教師という三つの関係を設定し、各関係に関していくつかの成果を発表してきた。生徒－生徒関係に関して、異年齢集団の混合という観点から年長児と年少児との関わりあいについて論じたことがある¹⁾。本稿は、オーデンヴァルト校の生徒－生徒関係に着目するときに異年齢集団の混合とならんで看過できない問題、すなわち「男女共学 (Koedukation)」について考察を加えようとするものである。

オーデンヴァルト校の創立者ゲヘープ (Paul Geheeb, 1870-1961) は、男女共学を「自由学校共同体」に不可欠の要素と考え、1910年の同校設立当初から徹底した男女共学を実践した。その試みは広くドイツ国内外に紹介され、ワイマール期には、オーデンヴァルト校は「疑いなくドイツで唯一の完全な男女共学をとっている学校」²⁾、「1920年までは、オーデンヴァルト校ほどきっぱりと信頼をもって男女共学であることを公言する田園教育舎は存在しなかった」³⁾と評されるにいたる。同校の男女共学実践は、新しい時代を切り開く勇敢な実践として賞賛されるにせよ、きわめて危険な行き過ぎた実践として批判されるにせよ、男女別学が一般的であった当時のドイツ社会において非常にセンセーショナルな試みとして受け止められた。本稿では、こうした男女共学をめぐる今世紀初頭ドイツの状況を視野に入れつつ、オーデンヴァルト校における男女共学実践の内実を解明することを目的とする。

その際、考察の視点としては、単に同校の創立者ゲヘープの男女共学論を分析するのみでなく、同校の日常生活において男女共学がどのように展開されたのかを、男女共学の主体ともいべき生徒らの目の高さからさぐってゆきたい。したがって、問題となるのは次の三点である。すなわち、①生徒がどのような男女共学の状況に置かれていたのか (経験)、②生徒が男女共学をどのように受け止め理解していたのか (知覚)、そして③生徒が男女共学のもとでどのように振舞い活動していたのか (行為)。本稿では、従来の研究で使用されることのない生徒の日記、回想録、自伝等を手がかりにしながら、教育的意図を出発点とした教育学論議においては見落とされが

ちな「教育を受けた側の現実」を描き出したい。この作業は、「カリスマ的に創設され、創立者自身の記述以上のことがほとんど吟味されてこなかった」⁴⁾ 田園教育舎系新学校の研究に対して、新たなパースペクティブを提供することになる。

以下、本稿ではまず、ドイツ学校教育制度史における男女共学の状況を概観する (I)。次に、オーデンヴァルト校での男女共学の実践にいたるゲヘープの経歴と彼の男女共学論を整理する (II)。最後に、同校の日常生活において生徒が男女共学をいかに経験・知覚・行為していたのか明らかにしたい (III)。

なお、あらかじめここで「男女共学 (Koedukation)」という用語について若干説明しておく。一般に「男女共学」という言葉のもとで、学校における男子と女子の混合の教育ということが理解される。類似の用語として「Koinstruktion」が存在するが、これは授業場面における男女の混合を指す。「男女共学 (Koedukation)」とは「Koinstruktion」を含むより広い概念であり、学校生活全般にわたる男女混合の教育を意味すると言える。

I. ドイツ学校教育制度史における男女共学

一般に学校教育制度における男女共学の歴史は、学校を取り巻くより広範な社会諸領域における男女関係の歴史を映し出す鏡であると言える。本章ではまず、主に19世紀から今世紀初頭にかけてのドイツ学校教育制度、とりわけ中等教育制度における男女共学の状況を、当時の社会背景との関連で簡単に素描しておく。

ドイツでは、18世紀後半から19世紀にかけて、官吏、医者、弁護士といった市民層が台頭してくる。彼らの間では、男性は家庭外の業績主義社会において経済、政治、文化、学問に従事し、女性は家庭内で妻、母、主婦という三重の役割を担うという、市民家族の近代的理想像が形成されていった。こうした市民層は数字の上では総人口のわずかな部分——世紀転換期で約10%以下——にすぎなかった。しかし、彼らの行動様式はしだいに他の社会階層、集団においても採用され、模倣された。「市民的」な家族構造と性役割は、19世紀には単に学者、官吏、企業家の範囲のみならず、労働者、サラリーマン、手工業者さらには農村的生活環境のなかにも徐々に浸透していった⁵⁾。

こうした性役割観の支配するドイツ社会ではながらく、中等教育段階以上の教育の対象は男子のみであり、女性

* 兵庫教育大学第1部 (教育基礎講座)

の中等教育は基本的に不必要とされた。確かに初等教育段階の「民衆学校 (Volksschule)」以外に、「中間学校 (Mittelschule)」及び「高等女学校 (Höhere Mädchenschule)」が女子に対して開かれていた。しかし両者はともに、教育目標が民衆学校の範囲を越えているが、中等教育施設として認可されていないという点で、民衆教育と中等教育の「中間の学校」という否定的なレッテルが貼られていた。高等女学校は1894年に9学年に規格化されるが、州法上ははまだ中間学校に位置づけられていた⁶⁾。プロイセン文部当局は1894年においてなお次のように考えていた。高等女学校に対して「男子の中等学校と同じように、女子教育用の特定の学校形態群を独自のものとして配置するのは、困難でしかも不必要なことである。とくに、「女子学校においては、将来の人生にとって決定的な意味をもつような特定の種類の資格は取得されないであろう」⁷⁾、と。

プロイセンでは、1908年に「高等女学校の新秩序 (Neuordnung des höheren Mädchenschulwesens)」が定められた。ここによく、高等女学校が正規の中等学校として認められることになる。こうした女子中等教育制度の成立してくる背景として様々な要因が考えられるが、なかでも特に次の2点を指摘することができよう⁸⁾。まず第一は、19世紀終盤の社会全体の経済的、政治的発展である。それは工業化、社会変動、階級的に固定された旧社会のゆらぎといった特徴を示しながら、経済的生活や公的生活における女性の地位と家庭の構造を変え始めた。第二は、ヘレーネ・ランゲ (H.Lange) やゲルトルート・ボイマー (G.Bäumer) らによって主導された女性運動である。それは伝統的な窮屈でこり固まった男性社会を批判するとともに、女性が自己の能力を發揮し男性と対等の発言権を獲得するための大きな推進力となった。こうした背景のもとで、高等女学校がよく正規の中等学校として認められるようになる。しかし注意すべきは、ここではあくまでも男子用の中等学校とならんで女子用の中等学校が制度化されたのであって、男女共学の中等教育制度が成立したわけではない、ということである。

第一次世界大戦での敗戦は古い正統主義と権威を弱め、1919年に制定されたワイマール憲法は、男女平等を基本的権利として認めた。普通選挙制の導入により、ドイツの女性は主要国の女性のなかで最初に参政権を獲得した。しかしながら、ワイマール共和国は実質的に女性に男性と等しい権利をもたらすところまでいたってはいなかった。フリーフェルト (U.Frevert) はワイマール時代における男女の関係を端的に次のように特徴づけている。

「男性領域と女性領域の境界はワイマール時代に多くの領域で往復可能なものとなり、とくに若い女性にとっては、以前は男性専科であった職業や運動や余暇活動に参

加するという特権享受のチャンスもときに訪れた。にもかかわらず、社会的、経済的、政治的行為を選択するにあたって男女の分離はまだ広く存続していたのである。」⁹⁾

ワイマール共和国におけるこうした状況のなかで、男女平等を求める女権擁護者の熱意は色あせていった。政治に関与できるようになったものの、政治的な影響力を与えられていないと女性は考えていた。男性は決して権力を放棄しようとはしなかったし、女性も彼らからそれを奪うことはできなかった。その結果、多くの女性は、男性に協力し、その対価として保護してもらうことが女性にとって唯一の効果的な戦略だという結論に達した。またワイマール期の奔放な時代に少数の女性、特に都市部の若い女性を興奮させた新しい「自由」は、大多数の女性を不安に陥れた。緊張と対立に満ちた近代社会のなかで危機感を抱いた彼女らは、伝統的で保守的な女性観に自己を結びつけ、男性的な家父長制を望むようになる。そして、こうした願望はナチス体制の男性中心的な性役割観を女性を受け入れる下地となっていった¹⁰⁾。

男女共学に関して言えば、ワイマール共和国の教育政策もまた、教会や保守派の圧力を受けて、原則的には男女別学の教育が望ましいという立場にたっていた。その結果、社会主義者エストライヒ (P.Oestreich) が「共和国学校会議 (Reichsschulkonferenz)」(1920年)に出した、男女共学とあらゆる上級の教育施設への女子の入学とを一般に認めるべきという提案は可決されなかった¹¹⁾。ただし、男子中等教育施設にはしばしば数名の女子生徒が混じっていた。プロイセンでは、そうした女子生徒は1911年から1931年の間に当該生徒数の約5%を占めていた¹²⁾。とりわけ社会民主党が唱えた男女共学は、1920年代後半の財政危機のおかげで(したがって男女共学の必要性からではなく)、各地で実現されていった。たとえば1933年のチューリングンでは女子学校よりも男子学校に通う女子生徒の数の方が多かった。もっとも、ドイツ全体では、男子中等教育施設における女子生徒の割合は1931年で6.3%にすぎなかった¹³⁾。

以上が中等教育施設における男女共学の概要であるが、最後に初等教育および高等教育段階における男女共学制度についても若干触れておきたい。

プロイセンで1717年に導入された義務教育は、男女両性を対象にしていた。しかし、女子に対して義務教育が貫徹されるのは男子よりもかなり後になってからのことである(就学率がほぼ100%に達するのは1880年代)。初等教育施設は原則的に低学年の子どもが通うものであり、そこでは性の問題よりももっぱら学校施設面の問題から、しばしば男女共学が実施されていた。1886年のプロイセンの民衆学校においては、男女混合のクラスが54704、女子クラスが10297、男子クラスが10096であっ

た。1901年には男女混合のクラスが69722、女子クラスが17250、男子クラスが17110に変化した。この15年間で男女別学の児童数が700000人増加したのに対して、混合クラスの児童数はわずか200000人の伸びにとどまり、混合クラスの割合は73%から67%に低下した¹⁴⁾。中間学校においても、少数ながら男女混合の学校は存在した。1901年のプロイセンでは、女子中間学校及び高等女学校が1102、男子中間学校が395であったのに対して、男女混合の中間学校が279であった¹⁵⁾。また高等教育施設に関しては、ながらくドイツの大学は女性を締め出してきたも同然の状態であった。大学への女性の入学が認められたのは、ようやく20世紀に入ってからのことである。すなわち、最初に女子学生が学生登録されたのは、ハイデルベルクおよびフライブルクの1901年であった¹⁶⁾。

II. ゲヘープの「男女共学」構想とオーデンヴァルト校設立

(1) オーデンヴァルト校設立にいたるゲヘープの経歴

当時のドイツ社会ならびに学校教育制度における男子中心主義に対するゲヘープの批判的態度は、すでに彼の学生時代に培われていた。彼はベルリンで学生生活をおくった際に、ブルジョア女性運動左派で「ベルリン婦人福祉協会」(1888年結成)の初代会長を務めたミンナ・カウアー(M.Kauer)と交流を深め、カウアー編の『女性運動』(1895年創刊)の発行にも協力していた¹⁷⁾。

ゲヘープによる男女共学の本格的な実践は、1906年のヴィッカーズドルフ自由学校共同体の創設とともに始まる。しかし、その端緒をすでにそれ以前の彼の活動のなかに確認することが可能である。彼はヴィッカーズドルフ自由学校共同体を開く前に、リーツ(H.Lietz)主宰のドイツ田園教育舎ハウピングダ校で1902年以来教師として働き、1904年の春より1906年の夏まで、同校の校長を務めていた。ゲヘープはこのハウピングダ校時代に、ごく少数ではあるが女子生徒の在籍を経験し、男女共学の手応えをつかんでいる。1905年の学校年報によれば、ハウピングダ校の美術教師コフェール(Kofahl)の娘エムリー(Emly)が、同校最初の女子生徒として3年間在籍していた。ゲヘープは彼女に関して、同年報で以下のように報告している。

「我々は、エムリー・コフェールとともに田園教育舎における最初の男女共学の試みをおこなってきたことを、一度たりとも後悔するようなことはなかった。逆に、この少女は我々の学校生活に貴重な影響を及ぼした。」¹⁸⁾

また翌年の学校年報でもゲヘープは、「我々の女子生徒の数は徐々に3人に増加した。そして、我々はこの小規模に実行される男女一緒にの教育の実験によって、非常にすばらしい経験を得た」¹⁹⁾と記録している。

しかしながら、ハウピングダ校での男女共学は、彼が認めているようにあくまでも「小規模」なものであった。同校では、彼の思い通りに男女共学を実践することはできなかったのである。その理由は、総長リーツの次のような教育方針によるものである。

リーツはなるほど、完全な男子校としてアボツホルム校を運営していたレディ(C.Reddie)とは異なり、こう考えていた。「男子と女子とを一緒に教育するということが、原則的には最も望ましい。なぜなら、そうした場合にのみ教育舎での家族的性格が完全な形で保たれるからである」²⁰⁾。けれども、リーツが実際に男女共学を実践する際には、女子生徒の入学が認められたのは初級のイルゼンブルク校(11歳まで)と上級のビーバーシュタイン校(17歳以上)のみであり、しかもその場合も、すでに学校に在籍している男子生徒の「優秀な」姉妹に限定されていた。ゲヘープがいたハウピングダ校(中級、12歳から15、16歳)については、「この年齢の男女の両性は、教育においてまったく異なった、時には正反対の教育の仕方を必要とする」²¹⁾という理由から、女子の入学は原則的に認められていなかった。1912/13年度の記録によれば、イルゼンブルク校では82名の生徒の内女子が4名、ハウピングダ校では88名の生徒の内女子が4名、ビーバーシュタイン校では生徒66名の内女子が1名であった²²⁾。3校合わせても全校生徒236名に対して女子はわずか9名(3.4%)であり、とても男女共学が行われていたとは言い難い状態であった²³⁾。

ゲヘープは後に、田園教育舎が目指すべき理想像をまとめた文章「田園教育舎の未来」(1912年)のなかで、男女分離型の田園教育舎を次のように批判している。

「これまでの田園教育舎の多くの施設では男女両性を分離することによって、兵營精神や修道院精神、そしてまた反道徳的状态を生んできた。未来の田園教育舎は、両性の分離が田園教育舎の家族的性格にとって最も有害な敵であるという理由で、そうした不自然なことをおこなわない。男性と女性、男子と女子と一緒に生活し活動することになるだろう。」²⁴⁾

男女共学を実践するというゲヘープの念願は、彼がヴィネケン(G.Wyneken)とともに1906年に創設したヴィッカーズドルフ自由学校共同体において初めて実現する。同校はドイツで男女共学を本格的に実践しようとした最初の田園教育舎系新学校であった。同校から出された最初の学校年報では、男女共学に関して次のような文章が掲載されている。

「最後に、世間の関心を最も引いていると思われる点、すなわち男子と女子の混合の教育について若干述べておく。もちろん、我々はこんなにも短期間で、とりわ

け女子の人数がまだまだ足りない状態で、最終的な経験を語ることはできない。我々は今のところ次のように言うことしかできない。すなわち、我々はいまだ、混合の教育という原理をぐらつかせるような経験を一度もしたことがないということである。男女両性の関係は、我々が期待していた通り健全で、無邪気で、友情に満ちたものだった。望むらくはただ、もっと多くの、そして真に健康的で有能で品のよい女子が我々の手にゆだねられることである。」²⁶⁾

ヴィッカーズドルフ自由学校共同体では、このように男女共学が一つの「原理」として掲げられていた。しかし、ここに述べられているように女子の人数は非常に少なく、1908年の時点で全生徒数65名の内女子の数は9名(14%)にとどまっていた²⁶⁾。また、寄宿舎も男子と女子でははっきりと区別されており、両者は別々の建物で生活することになっていた。

(2) 新学校設立請願書にみるゲヘープの男女共学論

ゲヘープは1909年初頭にヴィッカーズドルフ自由学校共同体を去った後、自己の教育論をより完全な形で実現できる新学校を設立するため、学校建設地を探してドイツ諸邦を旅して回る。その際、彼の希望は、ヴィッカーズドルフよりも完全な男女共学を実施できる学校を設立することであった。この旅行について、ペーターゼン(P.Petersen)は次のように述べている。「当時のドイツ各邦をめぐる彼の調査旅行は、文化史的にみて興味深い。とりわけ彼にとって重要なのは、男女共学という理念を実際に本気でおこなう田園教育舎を創設することであった」²⁷⁾。しかし、多くの邦は男女共学の実践に対して難色を示した。ヴィッカーズドルフのあったザクセン＝マインゲン以外に彼を友好的に受け入れたのは、オルデンブルクとヘッセンの二つの邦のみであった。最初ゲヘープはオルデンブルクのオイティン地方に教育舎を設立しようとするが、その計画は挫折する。そのため、最終的に、新学校建設地としてヘッセンのベルクシュトラッセ沿いの山間の村オーバー・ハムバッハが選ばれたことになった。

オーバー・ハムバッハに新学校を設立することに決めたゲヘープは、1909年8月30日付けでヘッセン邦内務省(学校局)宛てに長い新学校設立請願書を提出している。この請願書のなによりの特徴は、全44頁に及ぶ請願書の内約30頁が男女共学に関する叙述で占められているという点である。そこには男女共学に対するゲヘープの見解が明快に表されている。以下、請願書に記された彼の男女共学論を整理してみよう。

ゲヘープは請願書において、男女共学の必要性を説く前に、まず男女共学反対論に対する反論を展開している。

ゲヘープによれば、男女共学反対論は主に次の二つの考えからなされているという。一つは、両性の自然な相違から男女別学が必要であるという考え、もう一つは、道徳上の配慮から男女別学が必要であるという考えである。しかし、ゲヘープは前者に対しては、「女性と男性の個性に同等の注意を払える心理学的にも教育学的にも充分教養を積んだ教育者がいれば、両性の相違を理由に男女共学に反対する考え方は今や意味を持たなくなるであろう」²⁸⁾と反論する。また後者に対しても、「男女分離の教育をおこなっている町や邦より男女共学を施行している地域の方が不道徳な行為が多く起こっているという証明を、男女共学反対者たちは、いまだに我々に提出していない」²⁹⁾と反論する。したがって、「男女分離の教育を要求する理論的根拠も——幸せなことに——その実践的遂行も不完全である」³⁰⁾として、男女共学反対論が意味を持たないことを力説する。

続いてゲヘープは、近代教育学における男女共学推進論者の見解を提示しながら、男女共学の必要性を訴える。彼が依拠する人物及び著作は、例えばフィヒテ(J.G.Fichte)、『ドイツ国民に告ぐ』10章)、マリアンネ・ウェーバー女史(M.Weber)(H.ランゲ他『女子高等教育』所収)、ミュンスターベルク(H.Münsterberg)(ハーバード大学教授)、パルムグレン(K.E.Palmgren)(ストックホルムのサムスコラ校長、『教育問題』)、パウエル(J.Paul)(『レヴァーナ』)、ライン(W.Rein)(イエナ大学教授、『体系的教育学』第1巻)、ハイデルベルク上級実科学学校長(H.ランゲ他『女子高等教育』所収)、ホフマン(H.Hoffman)(『男子と女子の混合の教育』)等である。こうした男女共学推進論者を引き合いに出しながら、ゲヘープは自己の男女共学論を展開する。その論点は主に次の三点にまとめることができる。

まず第一は、広く社会生活一般のレベルにおいて男女両性の交際が不可欠であるという主張である。彼はそれについてこう述べている。

「人間の生活は男性的要素と女性的要素の間の絶え間ない相互作用のなかでいとなまれるものである。この両者が孤立すると、男性または女性の本質は活力を失い、ある一方方向への病的な発達をするというのは当然のことであり、必然的なことである。」³¹⁾

第二は、そうした健全な男女の交際が幼い頃から培われねばならないという主張である。

「男女両性の関係、すなわち両性相互の交際は実際的な問題であって、それが大人になった人間の間で初めて生じるものでないことは明らかである。それはごく幼児期にすでに存在した問題であって、その後青少年期のど

の段階にも、この問題は形を変えてますます複雑なものとなる。自分が青少年期に異性との個人的関係からどのくらい自然な振る舞いや倫理的価値を養うことができるかということは、大人となつてからの異性に対する自分の態度にとって決定的な意味を持つ。つまり、個人的な道徳的問題解決にとって決定的であり、愛情や結婚に対する態度にとって決定的なものなのである。」³²⁾

そして最後に、青少年期の男女の交際は優秀な教育者のもとでのみ実り豊かなものとなるという主張である。

「十分に訓練を受けた男性と女性の教育者の見守るなかで、男子と女子は一緒に成長すべきである。教育の英知という光をあてられ、暖かい雰囲気なかで、男女両性の相互関係は発達すべきで、こうして成長した男女は、肉体的・道徳的にも揺るぎない充分な力をつけて社会に出ていけるのである。」³³⁾

以上のような、①人間社会における男性的要素と女性的要素の絶え間ない相互作用の重要性、②大人社会の男女関係を規定する青少年期の健全な男女交際の必要性、そして③青少年期の男女交際に不可欠な教育者の援助、という論理。この三段階の論理がゲヘーブの男女共学論の基本線をなしている。ゲヘーブが妻エディス (Edith Geheeb) とともに1910年3月に作成したオーデンヴァルト校のプログラム書 (兼広告用パンフレット) でも、まったく同じ論理で男女共学の正当性が説かれている³⁴⁾。

さらに補足すれば、こうしたゲヘーブの男女共学論の基底には一貫して、現実のドイツ社会における男女関係に対する批判的態度が存在した。すなわち、現実の社会

では男女相互が理解し合い共に生きてゆくことを男性も女性も学んできていない、という認識を彼は常に有していた。そして、こうした大人社会の不均衡な男女関係を改善するための手段として、青少年期の教育において男女共学を実践することが不可欠だと考えたのである。したがって、ゲヘーブの男女共学の構想もまた、他の多くの新教育運動がそうであったように、「新しい」教育による「新しい」人間と社会の創造という社会改革的意図に方向づけられていたと言えよう。

ところで、こうしたゲヘーブの男女共学の構想に基づく新学校の設定は、「本来動きの鈍い国家が簡単には歩むことのできない新しい教育の道を、適当な人物に歩ませ、それによってそこでの諸経験を全体に役立てるということは、公共の利益となる」³⁵⁾ という理由から、ヘッセン邦政府によって認可される。ここにゲヘーブは、新学校オーデンヴァルト校においてヴィッカーズドルフよりも徹底した形で男女共学を実践してゆくための制度的条件を得ることになる。

以下では、同校の日常生活において男女共学がどのように展開されたのかを、男女共学の主体ともいべき生徒の視点から明らかにしたい。その際に考察されるべきは次の三つの問題、すなわち、①生徒がどのような男女共学の状況に置かれていたのか (経験)、②生徒が男女共学をどのように受け止め理解していたのか (知覚)、そして③生徒が男女共学のもとでどのように振舞い活動していたのか (行為)、という問題である。

Ⅲ. オーデンヴァルト校生徒の日常生活

(1) 男女共学に関する生徒の経験

オーデンヴァルト校の生徒数は開校初年度14名で、その後徐々に増加し開校10年目以降は100名を越える

表1. オーデンヴァルト校生徒の推移³⁶⁾

西 暦	性 別		宗 教				計
	男	女	プロテスタント	カトリック	ユダヤ	他	
1910/11	10	4	11	1	—	2	14
1911/12	19	8	20	2	3	2	27
1912/13	39	11	28	3	11	8	50
1913/14	49	19	36	5	13	14	68
1914/15	37	17	35	—	12	7	54
1916/17	37	22	42	2	9	6	59
1918/19	64	46	77	1	19	13	110
1919/20	58	34	65	3	13	11	92
1920/21	79	34	99	—	13	1	113
1921/22	67	51	72	2	32	12	118
1922/23	65	50	62	—	29	17	115
1923/24	61	39	57	7	21	15	100
1924/25	60	35	59	9	21	6	95

生徒が常に在籍していた。「表1」は、1910/11年から1924/25年（ただし1915/16年、1917/18年を除く）までの男女生徒数、宗教的属性、総数を示したものである。ここから読み取れるように、全生徒に占める女子の割合は、最低で1912/13年度の22%、最高で1922/23年度の43%、平均すると36%であった。つまり、全生徒のほぼ3分の2は男子、3分の1は女子であったと言える。宗教的属性に関しては、その大半がプロテスタント教徒によって占められていた。当時のドイツ社会の約30%はカトリック教徒であったのに対して、同校には全生徒のわずか3%しかカトリック教徒は在籍していなかった。カトリック教徒の間では、一般に男女の差異がより厳格に意識されていたのがその理由の一つであると思われる。

学校での生活は基本的に男女混合であった。授業は、午前中に教科授業が2時限（各2時間）、午後は木工や園芸といった実務作業（2-3時間）が行われていたが、いずれも男女の区別はなかった。授業外の生活は、寄宿舎における「ファミリー・システム」が基本になっていた。「ファミリー」とは、1人の教師あるいは一組の夫婦と平均7人の異年齢の生徒によって構成される生活単位である。ここでも男子と女子の区別はなく、男女が一緒になって一つのファミリーを形成していた。男女はそれぞれ個室あるいは2人部屋、3人部屋に分かれて住んでいたが、ヴィッカーズドルフと決定的に異なる点は、男女が別々の寄宿舎に暮らすのではなく、同一の建物のなかで壁を挟んで生活していることであった。このようにオーデンヴァルト校では、男子生徒と女子生徒とが時間的にも空間的にもきわめて密接に生活を共にしていたのである。ただし、毎日の日課になっていた「空気浴（Luftbat）」という裸体運動については、例外的に男女の区別がなされていた。

また、オーデンヴァルト校では、単に男女が時間的、空間的に一緒に活動していたというのみでなく、学校運営上の権限も男女に同等に与えられていた。例えば、一種の全校集会である〈学校共同体（Schulgemeinde）〉においても、参加、提議に関して男女の権限の差は存在しなかった。〈学校共同体〉の実施規則には次のように定められていた。

「各構成員は、学校共同体の次回の会議において話されるべきことを提案する権利を有している。そうした提案は提議とも呼ばれる。提議は、文書にしたかたちで、日付と署名を付記して議長に提出されねばならない。議長自身もまた文書による提議をおこなってもよい。」³⁷⁾

また、〈学校共同体〉の採決の時に行使される投票権も

男女に同等に与えられた。このことはまさに、「根本的に共同体を構成している全構成員が全体の責任を同等に担っているという見解を象徴的に表すものであった」³⁸⁾。さらに、〈学校共同体〉の議事を大きく左右する議長の役割を、女子が務めることもあった。

こうした〈学校共同体〉での男子と女子の同権について、ある女子生徒（Lydia Hertlein）は次のように報告している。

「・・・（男女の：論者）対等な経験というこの基礎のもとでは、男女両性の同権はもはや問題ではありませんでした。両者が同等の義務領域を担うということから——女子も男子もハウス内での仕事を遂行し、男子も女子も学校内外の諸々の係を引き受ける——、学校共同体での同等の権利が結果として生ずる。女子が男子に劣らず上手に学校共同体を運営することができるということは、男子が女子に劣らず上手にベットを整えることができるということと同じくらい、当たり前のことなのです。」³⁹⁾

この文章が示すように、オーデンヴァルト校では男女同権が共同体生活のなかに自然に溶け込んでいた。そして生徒もまたそのことを自明のこととして経験していたのである。

(2) 男女共学に関する生徒の知覚

男女別学が常識であった今世紀初頭のドイツにあって、男女共学は、オーデンヴァルト校に入学してくる多くの生徒にとっても未知の経験であった。あるカトリック教徒の女子生徒（Lilly）は、オーデンヴァルト校に入学する前に抱いた、不安と好奇心の入り交じった感情を次のように回想している。

「私がオーデンヴァルト校に入学しようと決心するとき、私には大きなためらいがありました。私は18歳になっているのに、なお馴染むことができるにはどうすればよいのでしょうか。そのようなことは一体可能なのでしょうか。私の最大のためらいは、まさにこの点にありました。それに加えさらに、カトリック教会に対するオーデンヴァルト校の関係が問題でした。当時私はカトリックの思想界に深く入り込んでおり、非常に敬虔なカトリック信者やカトリック的精神の持ち主と頻繁に交際していました。それ以外に私にとってとても興味深かったのは次のことです。つまり、学校の基本原則、とりわけ生徒の自己責任の思想と男女共学とがどのように実践に移されるのか、ということです。」⁴⁰⁾

このように男女共学は、オーデンヴァルト校に入学する生徒にとって好奇心をそそる事柄であった。しかし、それはしばしば大きな戸惑いをもって生徒に受けとめられた。ある男子生徒（Paul Schommerz）は、6年前に同校に入学した当時のことを次のように思い返している。

「私が1924年にOSO（オーデンヴァルト校のこと：論者）にやって来たとき、私はあらゆる面でいまだ非常に幼いものでした。私の周りの出来事はいまだ問題もなく、私を悩ませることもありませんでした。しかし、そうしたことはすぐに現れました。私は、OSOで生起する出来事に対して態度を決めることなしには、先に進むことができないと気づいたのです。

男女共学問題は私にとって最初の、最も困難な事柄でした。とてもオープンで自然に出迎えてくれる少女たちに対して、私はどのように応じたらよいのでしょうか。彼女らに対する私の態度は、まさにそうしたきこちないものであったに違いありません。」⁴¹⁾

また、別の男子生徒（Erwin Parker）にとって男女共学は、さらに衝撃的な問題として受け止められた。彼は両親に連れられて初めて同校を訪れた際に、同校が男女共学であることを知らされる。その時の戸惑いと嫌悪感を、卒業後、率直に以下のように綴っている。

「そして、とてつもなくいやなことが待っていました。この学校には女子もいるということを聞かされたのです。本当の女子！ 私が女子のなかにいるとは！これからすべてのことが——本当にすべてが——どれほど恐ろしいものになるか、想像もつかないくらいでした。

私たちは家庭では5人の男兄弟でした。女子というものは他人の子どもとしてしか知りませんでした。したがって、不可思議な同じ生き物として、つまり別の衣服をまとい、別の学校に通い、おろかな遊びに熱中し、甘たれていて、あまりにもよく笑い、また無意味に泣く同一種族のメンバーとして。しかし、同一種族であるということ以外にいかなる固有の存在理由も持たない存在として。そして私はこれから彼女たちと一緒に生活しなくてはなりません。毎日、毎時間、このような女子を見て、彼女たちと教室に行き、彼女たちと食事をし、彼女たちと遊び、彼女たちと話をしなければなりません。そして、ほかにどれほどのことが要求されることでしょうか。確かに、私はけっこうわんぱく坊主でした。かといって、それほど仕打ちを受ける覚えがあったのでしょうか。このような恥かしめを私が受けてよいものなのでしょうか。」⁴²⁾

当時12歳のこの生徒は男兄弟のなかで育ち、オーデンヴァルト校入学以前は男子校に通っていた。したがって、彼が男女両性の兄弟をもつ生徒よりも、女子に対して偏った認識を有していたであろうことは容易に想像できる。しかし、そのことを差し引いたとしても、当時の社会にあっては程度の差こそあれ、入学当初は男女共学に対して何らかの抵抗や戸惑いを感じていた生徒が多かったものと思われる。

他方、こうした生徒とは逆に、オーデンヴァルト校での男女共学の実践に何の抵抗もなく馴染む者もいた。ある女子生徒（Lydia Hertlein）はむしろ、同校に理想的な男女共学の形を見出し安堵したことを報告している。

「私はオーデンヴァルト校に入学する前に、2、3週間ある学校で生活を送りました。その学校はつい最近から男女共学を学校の看板にしていました。以前はただの男子校でしたが、今は100人の生徒のなかに10人の女子を受け入れていました。彼女らはファミリーの母の特別な監護のなかにおり、したがってファミリーについても男子とは嚴重に切り離されていました。男女共学について正しい考えを持っている人なら、こうした状況がいかなる結果を生んだのかをはっきりと想像することができるでしょう。

学校とは生活の理想像を示すべきものでした。男性的なものと女性的なものとが交互によみなく流れる輪舞を提供し、また使用するような生活の理想像をです。

ところがこの学校は、閉鎖という生命を脅かす像を示してきました。閉鎖とは、一方で生活の邪魔をし他方で生活に絡まりつく働きをします。盗み見、ひそかな手紙、人目を忍んでの散歩、——教師の側からすれば、他者への監視。これらはこの男女共学の悲しい帰結です。

私がオーデンヴァルト校に入学したとき、ほっとしました。ここには、私が思っていたような生活があったのです。つまり、どのファミリーにも女子と男子とがいて、年少児と年長児が一緒になっており、彼らは相互に助け合い、学び合っていたのです。」⁴³⁾

次の女子生徒（Drude Höppener-Fidus）もまた同様に、同校が男女共学であるということを受け入れた生徒の一人である。ただし彼女の場合、男女共学の現状に対しては、上述の女子生徒とは異なった認識を有していた。つまり、男女共学のあり方に改善の余地があると考えていたのである。彼女は日記にこう書き残している。

「そう、しかしOSOにも、人に自分自身の不完全な面や人間全体の不完全な面を想起させる、まさに痛烈

に想起させる問題があります。——それは、ここで目下私たち全員が苦労している中心問題、つまり男女共学のことです。——今や男子と女子の間に感心しない付き合い方が蔓延しており、誰もがそれに悩まされています。」⁴⁴⁾

彼女はその「感心しない付き合い方」の内容について具体的に説明を加えていないが、そうした状況を改善すべく、彼女は年長の女子生徒らと寄宿舎の一室で話し合いをおこなっている。その結果、「多かれ少なかれ誰にも責任があり、・・・多かれ少なかれ誰もそれに働きかける必要があり、全体としては今やすべてが自覚化されねばならない」⁴⁵⁾という結論に達したという。

(3) 男女共学に関する生徒の行爲

上述の通り、オーデンヴァルト校における男女の交流は、日常生活のあらゆる場面でなされた。例外的に男女が別々に活動する「空気浴」においても、男女の接触する場面があった。ある女子生徒 (Lydia Hertlein) は、男女が相互に尊重し合いながら空気浴を交代する様子を以下のように述べている。

「学校の上手の森のはずれに空気浴場がありました。毎朝授業時間の間に15分の空気浴をおこなうことができようになっていました。そこでは男子が先で、女子は後でした。男子が時間通りに終了しなかった場合には、私たちは待っていませんでした。ひょっとして女性の『偉大な忍耐力』を見込んで、そのように工夫されていたのでしょうか。

さて、学校が休みの日になりました。生徒たちの願いは、十分に空気浴ができることでした。今度は私たち女子が先でした。男子の気配が外でしたとき、私たちはまだ終了していませんでしたが、もうすぐに終わると約束しました。外からはそれ以上呼び声も催促もありませんでした。——私たちはそこでドアを開けてみました。すると、何ということでしょう。男子が空気浴場のドアのところから牧草地の下まで、長い列になって立っていたのです。しかも、2人ずつ向かい合って『黄金の橋』を作りながら。私たち女子は喜んで、順々にその長い小道をくぐり抜けてゆきました。そして思いがけない喜びのお礼のしるしに、後ろを振り返りながら仲間らに手を振ったのでした。」⁴⁶⁾

また、ある男子生徒 (Klaus Mann) は、自分と女子生徒らの間に活発な知的交流が日常的に存在していたことを、後に自伝のなかで次のように回想している。

「私はベルリンからきた三人の少女と親しくなった。

それぞれが他にまさる才能をもっていた。・・・私たちはみんな懸命になっていた。自作の詩を彼女らに読んでやると、そこからはげしい議論がはじまる。日曜の夜ゲーテ・ハウスで演奏された室内楽、移りかわる自然美、書物、絵、遊戯、あらゆるものが私たちを熱烈な対話にさそい、はげしく求め、つっこみ、あるいは脱線し、まいあがっては道を失うといった議論になった。私たちはほめそやし、挑戦し、批判しあった。相手の真意を確かめようと互いに努力したが、なかなしく自分をきわめようとした。自分と相手とに自己の天才を証明する必要があった。エーファは自分を天才だと思っていた。イルゼはエーファとオーダをほめたたえてたが、しかし自分にも少なからず自信をもっていた (彼女はバッハを演奏し、哲学者たちのことを勉強していたのだ)。私はエーファ、オーダ、イルゼの三人を賛嘆したが、自分としても彼女らに認められることを重大視していた。」⁴⁷⁾

男女の日常的な交流は、しばしば彼らの間に同志的な絆を形成した。ある女子生徒 (Drude Höppener-Fidus) は、エリザベス・ウーゲナン (E. Huguenin) という厳しい女性教師の率いるファミリーに所属していた。ファミリーの生徒は8人で、その内訳は男子4人、女子4人であった。その女子生徒は、消灯後その内の何人かとひそかに会合を開いていたことを、日記のなかでこう記している。

「全体としてみれば、まあエリザベス (ウーゲナン婦人) はとても行儀のよいファミリーを抱えていて、私たちのところは『修道院』と名づけられています。けれども、多くのひどい悪行が『ひそかに彼女のまったく知らないところで生起しています』。——私たちの就寝時間である10時30分をはるかにまわった頃に、『小ファミリーの秘密の会合』があるのです。そこに来るのは、ドラ、ズザ、アーノルド、フリーデル、そして私です。・・・それ以外にもファミリーに属しているのは、エルナ、パリー、ヘルバルトです。けれども彼らは私たちの小さなサークルに属してはいません。ところで今晩は、ズザの部屋で集会があります。10時30分以降に私たちみんなが彼女のところを訪問、いやむしろ忍び込みます」⁴⁸⁾

また彼女は別の日の日記のなかで、聖ヨハネの祝日の前夜 (Johannisnacht) にズザンネ、アーノルド、フリーデルの3人と共に寄宿舎を抜け出し、深夜3時15分から朝7時30分まで森のなかを徘徊したことを記録している⁴⁹⁾。男女生徒の交流は、教師の目の届かないところでも展開されたのである。

ファミリーを中心に形成される男女の同志的な絆は、時に恋愛感情にまで発展した。ある男子生徒（Erwin Parker）は卒業後、友人ホルガーとその恋人クレールヒェンとの交際を以下のように回顧している。

「ホルガー。・・・君とクレールヒェンは理想的なカップルでした。ロッチと私も理想的なカップルになろうとしたものです。けれども、君たちはすでに世界一でした。全てが君たちにお似合いでした。フォークダンスからサンダルまで。クレールヒェンのパーティー衣装からホルガーの黒のピロード・ジャケットまで。私たちには君たちが華やかに見えましたし、君たちもそのことを知っていました。どれほど君たちはとらわれなく、おおらかだったことでしょうか。どれほど自然に君たちが私たちの前で生活しており、また私たちが君たちの内情を知りたく思ったことでしょうか。君たちの純潔さは君たちがよく知っていました。君たちは一日中無邪気でした。——そう、君たちはまた、男女共学の原住民でした。——君、ホルガーは一度、私たちがいまだに敬愛しているA. V. K（女性教師ケラー：論者）が、なぜあなたは昨日そんなに遅く就寝したのですかと尋ねたのに対して、こう答えましたね。『クレールヒェンと私は男女共学の居残り授業をしていました』と。するとAはただ、『あなたがたは何か大事なことを話し合いましたか？』とだけ言いました。そして、それですべてが片づいたのです。』⁵⁰⁾

この文章は先述の、入学時に同校が男女共学であることを知らされて大きな戸惑いを示していた男子生徒によるものである。この文章からは、男女生徒間の「純潔」な恋愛とともに⁵¹⁾、彼の男女観の大きな変化を読み取ることができる。さらにこの文章において興味深いのは、男女の恋愛に対する教師の寛容な態度である。女性教師ウーゲナンもまた、生徒の恋愛に教師がいかに対応すべきかを、次のように述べている。

「感情が好ましく健全な仲間関係を越えることはまれである。だが、そうしたことが起こったならば、こうした感情をすぐに切り捨てるのではなく、この新しい感情が内面の充実の源泉となるよう、思いやりと優しさをもって若い人たちを援助してやるのが大人の課題である。』⁵²⁾

このウーゲナンの記述にしたがえば、オーデンヴァルト校においては、男女の恋愛は禁止の対象でなく、むしろ援助の対象として教師に受けとめられていたと言えよう。

おわりに

本稿では、オーデンヴァルト校の共同体生活においてきわめて重要な役割を果たした男女共学について考察してきた。その際、ゲヘープの男女共学の構想を解明するのみならず、彼の構想にしたがってなされた男女共学を、生徒たちが学校の日常生活においてどう経験・知覚・行為していたのか、という点に着目した。以下、そこで明らかになった点を今一度総括しておく。

今世紀初頭のドイツ社会では、いまなお男女の性役割が厳然と残っていた。中等教育段階以上の教育の対象はながらく男子のみであり、女子に対して中等教育が開かれるのはプロイセンでは1908年以降のことである。そしてその場合も、基本的には男女別学が一般的であった。

こうした状況においてゲヘープは、オーデンヴァルト校で徹底した男女共学を実践しようとする。ヘッセン邦内務省（学校局）に宛てた新学校設立請願書のなかに、我々はそのことを確認することができた。現実社会における男女の偏った関係を改善するという社会改革への情熱をもって、彼は男女共学をオーデンヴァルト校設立の第一の条件としたのである。

ゲヘープは、ヴィッカーズドルフ自由学校共同体での実践をふまえて、オーデンヴァルト校においてさらに徹底した男女共学を実現しようとした。オーデンヴァルト校では男子と女子が同一の寄宿舎で壁を隔てて生活していた。男女の間に学校運営上の権限の差も存在しなかった。だがこうした試みは、オーデンヴァルト校に入学してくる生徒にしばしば大きな戸惑いをもって受け止められた。なぜなら、同校に入学する時点で、生徒はすでに一定の男女観を身につけているからである。したがって、生徒はまず、そうした自己の既成の男女観を反省しなおすことを要求されることになる。そして彼らは、生活のあらゆる場面で男女の交流を通して徐々に、相互の尊重、同志的絆、知的交流、そして時に恋愛を経験していったのである。その際、場合によっては、男女生徒は教師の視線の及ばぬところでも、それゆえ「男女共学は教師の見守るなかで」というゲヘープの意図に反して、濃密な交わりを経験したのである。

最後に、オーデンヴァルト校における男女共学の実践が引き起こした社会的な反響について簡単に触れておきたい。同校の試みは、そこに入学する生徒のみならず当時の社会にとっても、きわめてセンセーショナルな実験として認識された。もちろん、同校の実践に対して肯定的な評価をくだす教育学者などがいないわけではなかった⁵³⁾。しかし、ゲヘープ自身が回想しているように、オーデンヴァルト校における男女共学の実践は、しばしば地元の教育関係者や教会からの中傷の対象となった⁵⁴⁾。さらにその実践は、男女共学の推進者からも、行き過ぎた実験として批判を受けることもあった⁵⁵⁾。

そして、ナチス政権によって、そうした生活全般にわたる男女共学の実践は実質的に禁止されることになるのである⁵⁶⁾。

(旧西)ドイツ学校教育制度においては第二次世界大戦後も男女別学が続いた。男女共学が普及するのは、ようやく1960年代半ば以降のことである⁵⁷⁾。ただし、今日においてもなお男女共学の是非については決着がつかないのが現状である⁵⁸⁾。その意味では、オーデンヴァルト校での男女共学の試みは、近代における男女共学思想の一つの実践的帰結であると同時に、今日まで継続される男女共学をめぐる議論の新たな出発点に位置するものであると言える。

註

- 1) 拙論「オーデンヴァルト校における『自由学校共同体』理念の実践化——生徒—生徒関係を中心として——」『広島大学教育学部紀要』第一部、第44号、1996年。
- 2) Karsen, F. : Ein Besuch in der Odenwaldschule, In: Elternbeirat, 2.Jg., 1921, S.458.
- 3) Pertersen, P. : Die Stellung des Landerziehungsheims im Deutschen Erziehungswesen des 20. Jahrhunderts; Ein typologischer Versuch, In: Huguenin, E. : Die Odenwaldschule, Weimar 1926, S.41.
- 4) Herrmann, U./Oelkers, J. : Reformpädagogik ; ein Rekonstruktions- und Rezeptionsproblem, In: Zeitschrift für Pädagogik, 40.Jg., Nr. 4, 1994, S.543.
- 5) Frevert, U. : Frauen-Geschichte zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit, Frankfurt a.M. 1986, S.15ff. (若尾祐司他訳『ドイツ女性の社会史——200年の歩み——』晃洋書房、1990年、9頁以下。)
- 6) Lundgreen, P. : Sozialgeschichte der deutschen Schule im Überblick, Teil 2, Göttingen 1981, S.68. (望田幸男監訳『ドイツ学校社会史概観』晃洋書房、1995年、172頁。)
- 7) Reble, A. (Hrsg.) : Geschichte der Pädagogik; Dokumentationsband 2, Stuttgart 1971, S.465, In: Lundgreen, P. : Sozialgeschichte der deutschen Schule im Überblick, a.a.O., S.67. (邦訳172頁。)
- 8) Reble, A. : Schulgeschichtliche Beiträge zum 19. und 20. Jahrhundert, Bad Heilbrunn 1995, S.126f.
- 9) Frevert, U. : Frauen-Geschichte zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit, a.a.O., S.196. (邦訳187頁。)
- 10) クーンズ, C. (姫岡とし子監訳)『父の国の母たち——女を軸にナチズムを読む——(上)』時事通信社、1990年、56頁以下。
- 11) Priester, K. : Frauenbildung, In: Brankertz, H. u. a. (Hrsg.) : Enzyklopädie Erziehungswissenschaft, Band 9, Stuttgart 1983, S.270f.
- 12) Lundgreen, P. : Sozialgeschichte der deutschen Schule im Überblick, a.a.O., S.68. (邦訳173頁。)
- 13) Frevert, U. : Frauen-Geschichte zwischen Bürgerlicher Verbesserung und Neuer Weiblichkeit, a.a.O., S.214. (邦訳203頁。)
- 14) Faulstich-Wieland, H. : Koedukation; enttäuschte Hoffnungen?, Darmstadt 1991, S.11ff.
- 15) Kuhlehn, F.-M. : Niedere Schulen, In: Berg, C. (Hrsg.) : Handbuch der Bildungsgeschichte, Band 4. München 1991, S.218.
- 16) Lundgreen, P. : Sozialgeschichte der deutschen Schule im Überblick, a.a.O., S.68. (邦訳、173頁。)
- 17) ゲヘーパは1891年に婦人教育連盟の集会でカウアーと出会う。カウアーの伝記を著したリュース(E. Lüders)によれば、両者の間には30歳の年齢差を越えて、母子関係に似た「まれにみる完全な友情」が芽生えたという。(Lüders, E. : Minna Cauer; Leben und Arbeit; Dargestellt an Hand ihrer Tagebücher und nachgelassenen Schriften, Gotha 1925, S.73.)
- 18) Geheeb, P. : Das 4. Jahr im D.L.E.H. Haubinda in Thüringen, In: Lietz, H. (Hrsg.) : Das siebente Jahr in Deutschen Land-Erziehungsheimen, Leipzig 1905, S.28.
- 19) Geheeb, P. : Das fünfte Jahr im D.L.E.H. Haubinda in Thüringen; Oster 1905 bis Oster 1906, In: Lietz, H. (Hrsg.) : Deutsche Land-Erziehungsheime in Schloss Bieberstein, Haubinda i. Thüringen, Ilseburg i. Harz; Das achte Jahr 1905/1906, Leipzig 1906, S.43.
- 20) Lietz, H. : Der Organisation der DLEH, In: Jahrbuch "Das 6. Jahr", 1904, S.45, In: Bauer, H. : Zum Theorie und Praxis der ersten deutschen Landerziehungsheime; Erfahrungen zur Internats- und Ganztags-erziehung aus den Hermann-Lietz-Schulen, Berlin 1961, S.121.
- 21) Lietz, H. : Grundsätze und Einrichtungen, Leipzig 1909, S.29, In: Bauer, H. : Zum Theorie und Praxis der ersten deutschen Landerziehungsheime, a.a.O., S.121.
- 22) Leben und Arbeit, Jg.1912, H.3/4, S.122, In: Bauer, H. : Zum Theorie und Praxis der ersten deutschen Landerziehungsheime, a.a.O., S.121.
- 23) ドイツ田園教育舎がリーツの死後(1919年)、アン

- ドレーゼン (A.Andreesen) によって指揮されるようになる、ビーバーシュタイン校も男女別学に転換する。アンドレーゼンは、ビーバーシュタイン校での男女共学を廃止した理由として、以下の4点を挙げている。すなわち、①「耽美的で女々しい」女子の存在は同校の「厳格できびしい男性的雰囲気」を損ねるから、②寄宿舎生活では男女の「性的衝動」を管理するための精神的負担が大きいから、③女子の存在は、他者の評価を気にして行動するという生徒の悪弊を助長するから、④女子の割合が少なく「希少価値」を有することは、彼女ら自身の成長にとっても喜ばしいことではないから、という理由である。(Andreesen,A.:Warum lehnen wir die Koedukation in Bieberstein ab?, In : Die Neue Erziehung, 8.Jg., H.2, 1926, S.106f.)
- 24) Geheeb,P.:Die Zukunft des Landerziehungsheimes, In : Das Alumnat, 1.Jg., Nr.3, 1912, S.106.
- 25) Geheeb,P./Wyneken,G. : Erster Jahresbericht der Freien Schulgemeinde Wickersdorf; 1.Sept.1906—1.März 1908, Jena 1908, S.27f.
- 26) Ebenda, S.10.
- 27) Pertersen,P. : Die Stellung des Landerziehungsheims im Deutschen Erziehungswesen des 20.Jahrhunderts, a.a.O., S.39.
- 28) Geheeb,P. : Entwurf des Planes einer privaten Lehr- und Erziehungsanstalt, S.21. (im Archiv der Odenwaldschule)
- 29) Ebenda, S.22.
- 30) Ebenda, S.24.
- 31) Ebenda, S.36f.
- 32) Ebenda, S.39.
- 33) Ebenda, S.41.
- 34) Geheeb,Paul und Edith : Die Odenwaldschule, In : Flitner,W./Kudritzki,G.(Hrsg.) : Die deutsche Reformpädagogik, Band 1, Düsseldorf/München 1961, S.72f.
- 35) N.N. : Neue pädagogische Wege; zur Eröffnung der Odenwaldschule, In : Frankfurter Zeitung, 3. April 1910, S.2.
- 36) Schäfer,W. : Die Odenwaldschule 1910 — 1960; Der Weg einer freien Schule, Heppenheim 1960, S.100.
- 37) Geschäfts-Ordnung für die Schulgemeinde der Odenwaldschule, 1.Auflage, angenommen am 22. November 1912. (im Archiv der Odenwaldschule)
- 38) Geheeb,P. : Erziehung zum Menschen und zur Menschheit, In : Bildung und Erziehung, 4.Jg., 1951, S.644.
- 39) Hertlein,L. : Koedukation in der Odenwaldschule, In : Die Neue Erziehung, 8.Jg., H.2, 1926, S.111.
- 40) Lilly :Erfahrungen einer Kameradin im ersten Odenwaldschuljahr, In:Der Neue Waldkauz, 6.Jg., Nr.3/4, 1932, S.40.
- 41) Schommerz,P.:unbetitelt, In:Der Neue Waldkauz, 4.Jg., Nr.3, 1930, S.29.
- 42) Parker,E. : Ein ehemaliger Landerziehungsheimer erzählt von>seiner<Koedukation, In : Harless,H. : Jugend im Werden, Bremen 1955, S.150.
- 43) Hertlein,L. : Koedukation in der Odenwaldschule, a.a.O., S.111.
- 44) Tagebuch von Drude Höppener-Fidus am 21.5.1916. (im Archiv der Odenwaldschule)
- 45) Ebenda.
- 46) Hertlein,L. : Koedukation in der Odenwaldschule, a.a.O., S.111.
- 47) Mann,K. : Der Wendepunkt; Ein Lebensbericht, Frankfurt a.M. 1953, S.109. (小栗浩他訳『転回点—マン家の人々—』晶文社、1986年、124頁)
- 48) Tagebuch von Drude Höppener-Fidus am 6.5.1916.
- 49) Tagebuch von Drude Höppener-Fidus am 23.6.1916.
- 50) Parker,E. : Ein ehemaliger Landerziehungsheimer erzählt von>seiner<Koedukation, a.a.O., S.153.
- 51) ただし、先に挙げた女子生徒が日記に書いていたように、「男子と女子の間で感心しない付き合い方が蔓延」しているという指摘が他方で存在したことも忘れてはならない。
- 52) Huguenin,E.: Die Odenwaldschule, Weimar 1926, S.57.
- 53) 例えば、1921年にプロイセン文部省学識専門委員としてオーデンヴァルト校を訪問したカルゼン (F.Karsen) は、男女共学について「男女両性の関係はまるで家族のように飾り気がなく自然であった」と報告している。(Karzen,F. : Ein Besuch in der Odenwaldschule, a.a.O., S.458.)
- 54) オーデンヴァルト校が設立されたオーバー・ハムバッハはカトリック教区に属していたこともあり、周辺の住民から男女共学の同校は不道德な学校とみなされていた。またゲヘーブは晩年、シェファー (W.Schäfer) との対談のなかで、ダルムシュタットの公立学校の教師たちがワイン酒場でオーデンヴァルト校の男女共学について次のように揶揄していたことを述懐している。「なんと男子と女子が森のなかをまっ裸で走り回っている。男女共学というのだそうだ。オーデンヴァルト校にはほったて小屋が建てられているらしい。」(Tonbandaufzeichnung vom Interview mit Edith und Paul Gheeb von Walter Schäfer im 12.1959, S.21.)

[im Archiv der Odenwaldschule]

- 55) 年月日は不明であるがゲヘープによれば、イギリスにおける男女共学校のパイオニアとして知られるビーデイルス校の共同校長 (Kodirektor) がオーデンヴァルト校を訪問した際に、ゲヘープに対して、同一ハウスで男女が寝起きしているのは「無責任で軽率」であるとして非難したという。(Ebenda, S.25.)
- 56) 1933年1月のヒトラー政権誕生は、オーデンヴァルト校の男女共学実践にとって決定的な意味を有していた。ナチスの教育政策は、教育理念を女子と男子とはまったく区別するという考え方から出発していた。ヒトラーは『わが闘争』において、「女子教育の不動の目標は、将来の母親たるべきことである」(ヒトラー, A. [平野一郎他訳]『わが闘争』角川書店、1973年、69頁)と断言している。この教育論を貫徹すべく、1933年4月7日、ナチス文部大臣リングスハウゼン (F.Ringshausen) がオーデンヴァルト校を視察している。シャーリーの研究によれば、リングスハウゼンは学校を去るときに、学校を存続させる条件として二つのことをゲヘープに命じたという。一つは、男女を別々の建物に住ませること。もう一つは、現在の教師陣を、ナチズムに同調する教師と入れ替えることである。翌年ゲヘープは、友人フェリエール (A.Ferrière) の援助のもとスイスへ亡命し、新学校 (Ecole d'Humanité) の設立に着手する。オーデンヴァルト校は同校教師ザックス (H.Sachs) の手にゆだねられ、ナチス教育政策と微妙な折り合いをつけながら第二次世界大戦の終結を迎えた。その間、一方でリングスハウゼンの命令通り男子と女子は別々の寄宿舎に分けられたが、他方で同校は、完全な男子校への転換を求める当局の通達に対して抵抗を続けた。それにより女子も学校にとどまることができ、かろうじて授業場面での男女混合は維持されることになる。(Shirley, D. : The Politics of Progressive Education; The Odenwaldschule in Nazi Germany, Cambridge 1992, P.106f.)
- 57) Knab, D. : Frauenbildung und Frauenberuf; Wider die Männlichkeit der Schule, In: Flitner, A. : Reform der Erziehung; Impluse des 20. Jahrhunderts; Jenaer Vorlesungen, München/Zürich 1993², S.146. (森田孝監訳『教育改革 二〇世紀の衝撃 —— イェーナ大学連続講義 ——』玉川大学出版部、1994年、149頁。)
- 58) 近年の男女共学の是非をめぐる議論を多角的にあつかった文献として、さしあたり Faulstich-Wieland, H. (Hrsg) : Abschied von der Koedukation?, Frankfurt a.M. 1987. を参照されたい。また、こうした議論が学校教師や研究者のみならず広く社会的関心を集め

ていることを示す一つの例として、『シュピーゲル』誌の1996年5月6日発売号で、近年の男女別学の増加現象に関する特集が組まれたことなどを指摘できよう。同表紙には、古い女子生徒の集合写真とともに「女子学校への回帰」「女性にとってチャンスは増えるのか」という文字が踊っている。

付記：本稿は、平成9年度文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

Ein Versuch der Koedukation zu Beginn des 20. Jahrhunderts in Deutschland

— Alltag der Schüler in der Odenwaldschule —

Takanobu WATANABE

Die Odenwaldschule von Paul Geheeb ist die erste Versuchsschule in Deutschland, die wirkliche Koedukation durchgeführt hat. Das Ziel dieser Abhandlung ist, innere Verhältnisse der Praxis der Koedukation in der Odenwaldschule zu erklären. Dabei handelt es sich um nicht nur Geheeb's Gedanken der Koedukation, sondern auch den Alltag der Schüler in dieser Schule. So ist das Inhaltverzeichnis wie folgt.

Vorwort

I. Koedukation in der Geschichte des deutschen Bildungssystems

II. Geheeb's Entwurf zur Koedukation und die Gründung der Odenwaldschule

(1) Geheeb's Lebenslauf bis zur Gründung der Odenwaldschule

(2) Geheeb's Gedanke der Koedukation im "Entwurf des Planes einer privaten Lehr- und Erziehungsanstalt"

III. Alltag der Schüler in der Odenwaldschule

(1) Erfahrung der Koedukation

(2) Empfindung für die Koedukation

(3) Verhalten bei der Koedukation

Schlusswort